

In God We Trust

(我ら神を信じる)

10ドル紙幣 (US\$ 10)

裏：米国財務省建物

表：アレキサンダー・ハミルトン(1755年-1804年)

弁護士、ジャーナリスト、財務長官「建国の父」の一人

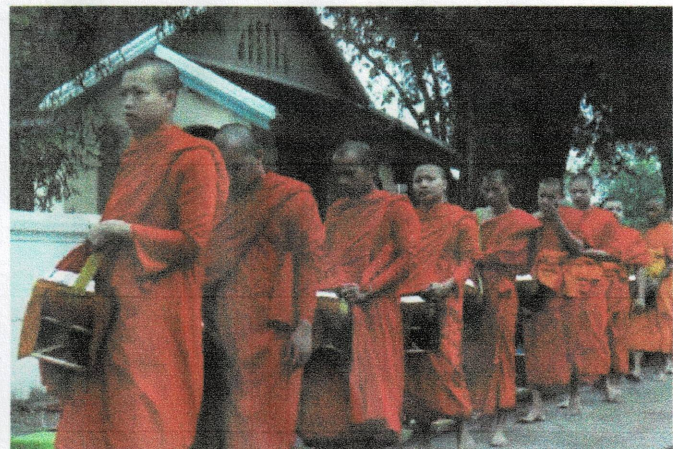
浄信寺通信

平成28年夏号

名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL (〇五二) 五六一一七三六
頒布価格年 千三百円
(檀信徒会費)

東南アジアの諸国を訪れる場合、現地の通貨に両替する事なく、通常米国ドル紙幣に両替して持参する。

そのドルには、必ず【In God We Trust】と印字されている。日本語に訳せば、「我々は神を信じる」と言う意味である。一九五六年のアメリカ議会でも可決された法律に基づいている。多民族国家のアメリカでは、宗教的な慣習も法律で定められている事例が多いと聞き及んでいる。米国民の自国に対する誓約の言葉には、「Under God」(神の元)。(裁判所での宣誓文にも「So help me



※世界遺産都市ルアンパバーン(ラオス) 托鉢風景

God(神のご加護を)という文言等である。

別れの挨拶で「Goodbye」と言うのだが、これも正確には、「God be with you(神があなたとともにあらんことを)」が縮まったものと言われている。ドルを使う人が全員【神(God)】を信じている訳では無い。同時に、日本語の日常慣用句が、仏教の言葉から由来している事を知らないで話している場合も多い。

我々日本人には、キリスト教の信者たちは、毎週日曜日の教会のミサに参加していると思いがちではあるが、島田裕巳氏「宗教消滅」

平和公園墓参のご案内

日時： 8月12日(金)
13日(土)

午前8時頃～午後1時頃

※ 日帰りバス研修旅行参加者募集

日時 8月31日(水) 集合8時50分
新幹線口(西口) ビックカメラ前
会費 13000円
行先 遠州 秋葉山本殿。掛川城。
北の丸(昼食遠州食材の特別料理)
主催 中村区仏教会
締切 8月20日(土)
お問い合わせ： 浄信寺 561-1736

によれば、そうした光景も、フランス等では過去のものになりつつある現状を紹介されている。そして、日本人の【無宗教】と言う概念ではなくて、神の存在を否定する無神論者が増加しており、イスラム教徒の移民等に伴い世界的規模では、イスラム教が徐々に増えつつあり、やがて世界の人口の一〇人に一人はイスラム教になるとの予想もある。

□□□□□

出入国カード等に、自己の宗教を記載する欄があると何と書けば？

日本人の多くは戸惑を覚える。又宗教についての世論調査を見ると、「何かの宗教を信じていますか？」の設問には、「特に信じている宗教はありません」との回答が、七〇％を上回っている。

日本人のこうした、宗教に対する姿勢を、一宗教を信じる外国人からは、奇異に感じたり、時には日本人の人間性そのものに疑問を抱くと言う話を時折聞くのである。

こうした事は、明治以降に英語の Religion を日本語に翻訳する時に、

宗法・宗門・法教・教門・聖道・神道等と候補があつたと言われているが、それが『宗教』と言う日本語に翻訳された。一神教的な世界の言語として Religion (宗教) を、そのままた多神教の日本社会の仕組みの中で『宗教』と言う言葉が使われてきた事に対しての、戸惑いが、無宗教と言う答えを多くの日本人が導いている結果ではないだろうか。

同時に、仏教各派の明治の廃仏毀釈の混迷から抜け出す方策として、西欧の近代学問の方法論を取り入れた宗教学・仏教学が流布するに従って、いまままで日本人が何気なく慣習として行ってきた、宗教行為が、近代宗教学や仏教学からの視点から見れば、アニミズムとして排斥された結果、Religion『宗教』と言う言葉の意味を曖昧模糊として受け取っているのが現状である。

宗教学者の中村圭志氏はよれば、『宗教には「濃い宗教」と「薄い宗教」が有り。濃いとは、思い入れの強い世界。神仏の絶対的な救いを信じて、時には排他的になるほどに、自己の信念を守っている。他方薄い

と言うのは、知識や習慣と言ったレベルで人々に受け入れられているような宗教的文化の事だ」と定義されている。世界の宗教を見回してみると、ほとんどの人はそれほど濃厚な信仰を持っていないのが現実である。濃厚な信仰を持っていない人々が大部分であり、深い信仰がなければ、宗教を理解できないと言う一種のドグマに洗脳されているのではないだろうか？宗教を理解するには、その宗祖の思想を深く究明する事も必要ではあるが、同時に又横の広さも大切な事である。

□□□□□

お盆には、故郷の先祖のお墓参りを事欠かせない日本人の行動は、宗教のもつ横の広がりの意味を考えさせられる、日本人独自の宗教行為であると言えるのではないだろうか。

時には激しい災害、四季折々の美しく優しい表情、変幻自在に変化する豊かな自然環境に囲まれ、独自の文化習慣を育んできたこの国の人々は、そうした自然環境や

事象に、神や仏の姿をみる八百万の宗教観を発展させてきたと言われている。人智を越えたところに超越的な何かを感じて祈り・祀ってきたのである。それは宗教ではない、精霊、靈魂、神様が自然の中に宿ると言うアニミズムであると片づけてしまったのが現代社会である。人工物に囲まれて暮らす現代の人々には、全く無縁の世界と考えられても当然の事かも知れない。

しかし、宗教に関する世論調査では「自然の中に人間の力を超えた何かを感じる」と回答した人が過半数を超えている。又先祖を敬う気持ちを持っていると答えた割合は、実に九十四％に達している。こうした日本人の宗教意識をどう考えたらいいいのか。山折哲雄氏も言われているが、明治以前までは、宗教を、他国と比較をする事を必要としなかった日本人が、Religion『宗教』と言う語彙では、何とも定義しがたい、日本人独自の八百万の宗教観を、未整理・未消化のままに、いつしか一神教的な宗教価値観が、普遍性を有

する事と理解して、自らは「信じる宗教はない」と答へざる得なかつたのではないだろうか。

多くの日本人の【ご先祖さま】という概念には、この世からすでに超越した存在に一種の畏敬と祈念を持ち続けてきた感性に、日本人の宗教にたいする思いが込められている気がする。それは平安時代比叡山で、生み出された天台本覚思想と言われる山川草木悉皆成仏(野に咲く花にも、仏(ほとけ)は宿る)にも通じる世界である。

先祖を敬い、自然の中に、人間の心智を超越した神や仏の姿を感じた、日本人の豊かな宗教的感性に寄り添う事なく、どこかに置き去り、机上の空論を押しつけがましく語ってきたのが近代教学に基づいた伝統宗教教団の姿ではないのだろうか？

お盆や年忌法要が、先祖供養の習俗であり、仏事になっていないと、我田引水の宗教観で語られる宗門学者の言葉に、どこか納得できない気持ちを持ちながらも、受け入れてきた結果、日本人の豊かな宗教観念とし

ての営みが、宗教として語られる事がなくなり、単なる儀礼・年中行事になってしまった。昨今「宗教消滅」などと題された本が出版される根本原因が、ある意味では、そんなところにあるのかも知れない。

宗教は、私の概念や、思考と言う小さな器びやうのものさしを、超越する真理だからこそ、宗教たる所以ゆゑんなりうるのである。創始宗教と謂われる仏教・キリスト教・イスラム教の祖師達は、その教え(真理)ゆえに世界宗教たりえたのである。そうした祖師達の命がけでの、この世界のあらゆる【いのちいとなみ】に、人間の力では乗り越える事のできない、超越的な何かを感じ語り伝えた言葉が、それぞれの固有名詞としてのブツダでありキリストであり又ムハノンマドと名付けられた。日本人が自らの記録を残す手段(文字)がなかった時代には、そうした超越的な存在が、八百万の宗教観であったと言えらる。それが、中国を経て伝来した大乘仏教の思想に、奇跡に近い形で習合・融合して、日本人の【ご先祖さま】と謂う概念に見事なまでに具現化された事に間違いないと思う

のである。

□□□□□

二〇世紀初頭の社会学者や民族学者、人類学者などに多大な影響を与えた、フランス人で、総合社会学(社会のあらゆる分野にまたがる統一的な学問)の提唱者の一人のエミール・デュルケムは、宗教について、「同一の道徳的共同社会に、これに帰依するすべての者を結合させる信仰と実践の一体系である」むつかしくて難解な言葉だが、簡単に要約すれば、個人の行動や考え方は、集団や社会のしきたり・慣習などに支配されると定義した。

逆説的な言い方では、日本人の個々の【ご先祖さま】という概念は、個人個人の帰属(家の宗教)から切り離す事のできない、神や仏であるが故に、集団(ここでの意味は宗教教団)として担ぎ上げにくい存在として、純粹・素朴な信仰を持ち続けているのかも知れない。

ドイツ生まれの禅僧で、多くの著作を発表されているネルケ無方氏は、独特の自然環境によって育まれてきた先祖を敬い、神仏を大切にす

る宗教感性を日本人は、受け継いでいるにもかかわらず、自らは「無宗教」と答える事に対して、ユニークな視点を提示されている。【無】と言うのは有り無しの無ではなくて、大きな【器】。つまり無心が、心が無いと言う事ではなくて、英訳で、No Mind 又は Empty Mind と訳される意味ではなくて、No Mind. Empty Mind. Free Mind. Open Mind と訳される意味で、『自由な心』『開かれた心』で全てを受け入れる事ができる心である。

同時に、【無宗教】と言う意味も、英訳での No Religion ではなくて、Free Religion. Open Religion であり。流れる水のように自由に変わり続ける謂わば Flowing Religion (つまりは、無という大きな器を持って、相手を否定する事なく、相手を受け入れるという意味での、まったく別の次元での「無宗教」であり。そうした意味での「無宗教」こそが、宗教の名のもとに世界で頻発しているテロに対する解決にいたる答えになる可能性をも、示唆されている事は、正しく卓見であると思うのである。

文明の十字路

ウズベキスタンを旅して

日本から、七千キロ、中央アジア、ウズベキスタンの地には、古代より様々な民族が入り乱れ、盛衰を繰り返してきた。古くはホレズム、ソグディアナ、バクトリアなどの民族が、繁栄を極めていた。

古代イランにおこったアケメネス朝ペルシャは、それらの先住民族を徐々に駆逐し、この地の支配者となり。紀元前四世紀には、ペルシャに



※青の都サマルカンド世界遺産のイスラム様式建築群

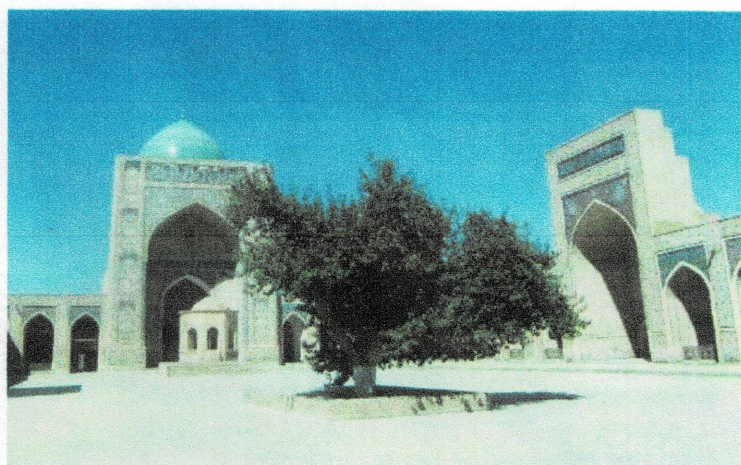
代わって、アレクサンドロス大王が支配した。その後、バクトリア朝やクシヤン朝、エフタルなどの国家が興り栄え、やがて八世紀には、アラブ人の進攻を受けて、この地に、イスラム教が伝えられた。

そして十三世紀には、空前絶後の大帝国を打ち立てたチンギスハーンひきいるモンゴルの大軍勢が、中央アジアを蹂躪して破壊しつくした。

モンゴルの勢力が衰えはじめた十四世紀後半に、遊牧の民の血を受け継ぐ、中央アジアの英雄として今に語り継がれているティムールが、この地から、トルコ西アジアまでの広大な地に、ティムール帝国を樹立して復興した。この時代に建てられた壮麗な建物が、世界文化遺産として登録されている。

サマルカンド、ブハラ、ヒヴァ、シャフリサブズといった都市の名前を聞く度に、どこかオリエンタルな響と、ターコイズ・ブルーのタイルのドームに象徴される、美しさを魅了しつづけている。

こうした街は、同時に、広大なユーラシア大陸を、ローマから、



※カラーン・モスク（ブハラ）16世紀1万人収容規模

中国を経て、日本にまで繋がる、シルクロードの交差点として、繁栄と栄華を究めた場所でもあった。一九九一年ソ連邦が崩壊して独立し、変貌をとげつつある、ウズベキスタン共和国を訪れた。



※遺跡から出土の仏像

修 勤 講 恩 報

平成28年11月9日（水）
午前10：00～
勤行・お説教・おとき

そこには、初めて見た見た壮大なイスラム様式の建物に驚嘆し、南部のアフガニスタンの国境の町のテルメズには、紀元二世紀頃に、隆盛を極めたカラ・テパの仏教遺跡を訪れて、大乘仏教伝来の源流を見た気がした。親日的なこの国の人々の笑顔が、今も忘れられない旅であった。

住職が撮影した映像をDVDに編集してありますので、ご希望の方は進呈しますのでお申し出下さい。

編集後記

今年の寺報をお送りするのが、遅くなってしまいました。「住職」